

序 文

視覚の障害は行動、文章の読み書きの自由を奪うが、今日のコンピュータの発達は視覚障害から起こるこのようなハンディキャップを軽減するのに寄与している。しかし、個人の多様なニーズへの対応や機器の入手、指導者の養成など多くの課題を抱えているのも現状である。

この度の筆跡を音に変換してフィードバックする「音響デバイスとその応用に関する調査研究」は、視覚障害者が文字を手で書く自由を再び取り戻すための第一歩と言える。線の構成、バランスなど視覚による認識をどこまで聴覚で補えるか、私たち視覚障害者にとって本研究は待ち望んでいたものである。

先天性の視覚障害者には困難な複雑で数も多い漢字の学習に、中途失明者には消えてしまいそうな過去の記憶を呼び起こし再び文字を書くために、「音」を利用したガイドは有効である。視覚障害者が社会の中で生活し、勉強し、仕事をしていくためには点字ばかりでなく、一般の人々と同じように漢字を使うことや手紙のフォーマットなど視覚的な処理も要求されてくる。さらに本研究が進み、コンピュータの入力手段としてキーボードやOCR、音声などとともに、音によるフィードバックをもつ手書き文字が加わることも期待される。一般に用いられるキーボードは視覚障害者にとってはキーの数も多く練習が必要だが、手書き文字による入力ならば中途失明者はすぐにコンピュータを使うことができるであろう。

視覚障害者が活動しようとするとき、多くの手段の中からもっとも適したものを選べるようにすることが必要であり、音響技術を活かした本研究が聴覚と触覚による無限の可能性に挑む視覚障害者を支援し、文化の向上に役立ってくれることを願うものである。

盲人用筆記支援システム調査研究委員会

委員長 松井 新二郎